

■（１９８）中学生の新聞づくりから見える復興の流れ

岩手県釜石市立釜石中学校の生徒２５人が、新聞づくりに取り組んだ。テーマを自分らで選び、電話で取材のお願いをすることから始めた。バスの時刻を調べてでかけ、手作りの名刺交換。考えていった質問をぶつけてメモをとる。記事を書いて見出しをつけた。

NPO法人の力を借りて２年前から夏休みごとに続けている。その記事や見出しを見ていくと、東日本大震災からの復興で、子供らがどこに関心を持っているかがわかる。２年前のアタマの記事は釜石市長インタビューで、見出しは「公営住宅整備に全力」。確かに当時、３千戸の仮設住宅がある中、完成した災害公営住宅は１棟だけだった。去年は「お帰り笑顔 夏熱く」。震災で中断した釜石の夏祭りが完全復活した話題だった。中学生自ら、大通りで繰り広げられる踊りに参加して、大勢の笑顔に接した。その横の記事は、被害を受けた中心部に、大型商業施設がオープンした話題だった。

そして今年。ラグビーW杯開催決定や橋野鉄鉱山の世界遺産登録と話題が豊富な中、意外にも人気は市長インタビューだった。生徒たちはまちの未来を真剣に考えていた。（山）